



令和 8 年度病害虫発生予報第 7 号

令和 8 年 8 月 2 6 日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	イ ネ	いもち病（穂いもち）	—	やや少ない
		紋枯病	—	多 い
		トビイロウンカ	—	やや少ない
		斑点米カメムシ類	—	やや多い
	ダイズ	紫斑病	平 年 並	平 年 並
		ハスモンヨトウ	—	平 年 並
		カメムシ類	—	やや多い
果樹	ナ シ	シンクイムシ類	平 年 並	やや多い
		ハダニ類	—	やや多い
	カ キ	炭疽病	平 年 並	平 年 並
	果樹共通	カメムシ類	—	やや多い
野菜	ブロッコリー、イチゴ	ハスモンヨトウ	—	平 年 並
	ネギ、ナガイモ	シロイチモジヨトウ	—	やや多い

気象予報（抜粋）

1 か月予報（8 月 2 2 日～9 月 2 1 日：8 月 2 0 日 広島地方気象台発表）

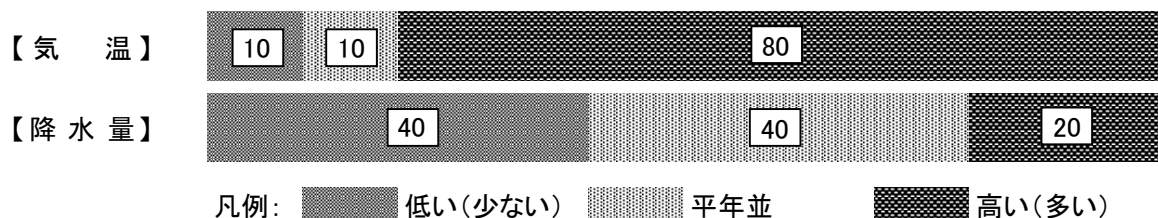
向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

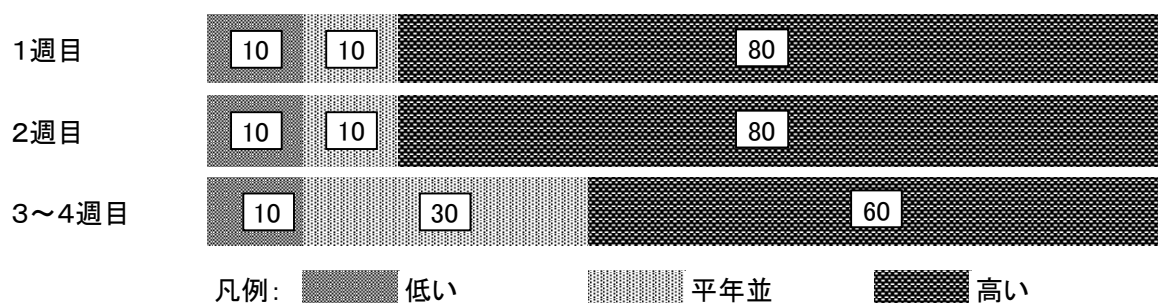
向こう 1 か月の平均気温は、高い確率 8 0 % です。

週別の気温は、1 週目は、高い確率 8 0 % です。2 週目は、高い確率 8 0 % です。3 ～ 4 週目は、高い確率 6 0 % です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>





普通作物

[イ ネ]

1 いもち病（穂いもち）

（１）予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	やや少ない

（２）予報の根拠

ア ８月上旬の巡回調査定点地区における葉いもち発生ほ場率は３．３％（平年：６．９％）と平年より低い。

イ 「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」等の早生品種では、穂いもちの感染時期である穂ばらみ期～穂揃い期が好天で経過したことから、穂いもちの発生は助長されない。

ウ 「きぬむすめ」等の中生品種では、極一部の山間地等を除き、穂ばらみ期～穂揃い期が好天で経過していることから、穂いもちの発生は助長されないことが予想される。

エ 向こう１か月の気象予報から、本病の発生を助長しない気象条件となると見込まれ、本病の発生は平年よりやや少ないと予想される。

（３）防除上注意すべき事項

ア 穂いもちは発生後の防除が困難であるため、中生品種の栽培、遅植え等により、これから出穂を迎える地域では、穂ばらみ期及び穂揃い期の２回防除を徹底する。

イ 降雨が続く場合は、雨の止み間をみて防除を行う。この場合、散布後から降雨が３時間程度なければ、防除効果は十分にある。

ウ 上位葉における発病が多く、穂いもちの多発生が予想される場合は、傾穂期（穂揃い期の７～１０日後）の防除を追加する。

エ 「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、「きぬむすめ」等のいもち病に弱い品種の栽培、窒素肥料の多施用、遅植え等の条件では特に発生しやすい。

オ 鳥取県では、平成２６年にストロビルリン系薬剤耐性イネいもち病菌の広域発生が一部の地域で認められ、平成２７年以降、本系統薬剤の使用を中止していた。しかし、その後のモニタリング調査から、現地ほ場において耐性菌が生存している可能性は低いと考えられたため、令和５年から県内全域の一般ほ場において、本系統薬剤の本田地上散布剤及びヘリ防除剤の使用を可能としている。ただし、耐性菌の再発生を防ぐために、本系統薬剤の同一年における連用と採種ほ場及びその周辺ほ場における使用を控える。

カ 葉いもちの追加防除を行ったほ場では、農薬の総使用回数を超えないよう十分注意して穂いもち防除薬剤を選択する。

2 紋枯病

（１）予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	多い

（２）予報の根拠

ア ７月下旬の巡回定点地区における本病の発生ほ場率は３０．０％（平年１２．５％）と、平年に比較して高い。

イ ８月２０日現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における本病の病斑高率は平年並～やや高い（病斑高率：コシヒカリ；本年４０．９％、平年３９．３％、



日本晴；本年 35.8%、平年 29.1%）。

ウ 本年のイネの茎数は平年並～やや多く、本病の発生に好適な状況となっている。

エ 向こう 1 か月の気象予報から、今後も本病の発生に好適な条件が続くと見込まれ、本病の発生は平年より多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

令和 8 年 8 月 7 日付け令和 8 年度病害虫発生予察注意報第 5 号（イネ紋枯病）を参照。

3 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 8 月中旬現在、予察灯への誘殺は認められていない。

イ 8 月中旬現在、現地ほ場における本種の発生は認められていない。

ウ これまでの発生状況及び向こう 1 か月の気象予報から、本種の発生は平年よりやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本種の発生は、ほ場間差が大きいいため、ほ場における生息密度に注意する。特に、ウンカ類の常発地において、育苗箱施薬及び出穂前後の防除を行っておらず、9 月末以降に収穫を行う中生～晩生品種等の栽培ほ場では、注意が必要である。

イ 8 月下旬～9 月中旬の要防除水準（成幼虫数 10 頭／株）を超えたほ場では、病害虫防除指針等を参考にして粉剤、水和剤等で直ちに防除を行う。なお、散布の際、本種の生息場所である株元に薬剤がかかるように注意する。防除に当たっては、農薬使用基準を厳守する。

4 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8 月中旬現在、巡回調査定点地区の穂揃い期～乳熟初期の水田では、斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ等）の多発生ほ場が散見されている。

イ これまでの発生状況及び向こう 1 か月の気象予報から、本種の発生は平年よりやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

令和 8 年 7 月 22 日付け令和 8 年度病害虫発生予察注意報第 4 号（斑点米カメムシ類）を参照。

[ダイズ]

1 紫斑病

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並



(2) 予報の根拠

- ア 大豆の成熟期は平年並と見込まれることから、本病の発生時期は平年並と予想される。
- イ 向こう3か月の気象予報から、本病の発生量は平年並であると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 病害虫防除指針等を参考にして、水和剤又は粉剤を使用して防除を行う。
- イ 紫斑病とカメムシ類を同時防除する場合は、カメムシ類の項を参照する。

2 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月第4半旬～8月第3半旬のフェロモントラップの総誘殺数は、やや少ない～平年並である。
- イ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 若齢幼虫の加害によって発生する白変葉の早期発見に努め、発生初期の場合、葉の切除等による捕殺を行うか、病害虫防除指針等を参考にして粉剤、水和剤のスポット散布を行う。
- イ 防除の目安は、1a当たりの白変葉か所数5か所以上とする。なお、新葉の出葉により、白変葉が確認されにくいほ場が多いので、ほ場周辺のみならず、ほ場内での観察も丁寧に行う。
- ウ 若齢幼虫に対する登録農薬の効果は高いが、幼虫の齢期が進むと防除効果が低下するため、防除適期を逸しないようにする。

3 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、予察灯におけるイチモンジカメムシ、アオクサカメムシ及びホソヘリカメムシの誘殺数は平年並である。
- イ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生量は平年よりやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 紫斑病防除に水和剤を使う場合

(ア) カメムシ防除にネオニコチノイド系又はフェニルピラゾール系殺虫剤を使用する場合

- ・開花期後30～35日（全体の花が終わった時期）の1回防除を基本とし、紫斑病防除薬剤（アミスター20フロアブルの2,000倍）及びカメムシ防除剤（ダントツ水溶剤、スタークル顆粒水溶剤、キラップフロアブル等、ただし登録範囲内で最も高い希釈倍率）の混用で100L／10aの薬液を散布する。なお、展着剤を必ず加用する。
- ・カメムシ類の発生が多い場合は、前回散布の10日後に、カメムシ防除剤（病害虫防除指針等を参考にして水和剤あるいは粉剤）を散



布する。

(イ) カメムシ防除に上記以外の殺虫剤を使用する場合は、2回防除を基本とする。

- ・ 1回目：開花期後25～30日（全体の花が終わった時期）
紫斑病防除薬剤（アミスター20フロアブルの3，000倍）と
カメムシ防除剤（トレボン乳剤等）の混用で、150～300L／10a
の薬液を散布する。なお、展着剤を必ず加用する。
- ・ 2回目：1回目防除の10日後
カメムシ防除剤（病害虫防除指針等を参考にして水和剤あるいは粉
剤）を散布する。

イ 紫斑病防除に粉剤を使用する場合

- ・ 1回目：開花期後25～30日後
トライトレボン粉剤DLを散布する。
- ・ 2回目：1回目防除の10日後
カメムシ防除剤（スタークル粉剤DL、トレボン粉剤DL等）を散
布する。

ウ 水和剤、粉剤体系ともカメムシ類及びその他の害虫が多い場合には、
追加防除を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期	平 年 並
発 生 量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、現地9地点のフェロモントラップにおけるシンクイムシ類の
発生時期は平年並、発生量は地点により異なるが、概ね平年並～平年に比べて
やや多い。

イ 8月中旬現在、県予察は場（園芸試験場、ナシ‘ゴールド二十世紀’、無
袋・殺虫剤無散布）におけるシンクイムシ類の果実被害は例年に比べて多い。

ウ これまでの発生経過及び向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの
第4回成虫の発生時期は平年並の8月中～9月上旬頃、モモシンクイガの第2
回成虫の発生時期は平年並の8月上～下旬頃で発生量はやや多いと予想され
る。

(3) 防除上注意すべき事項

ア シンクイムシ類の発生盛期となる8月上旬～9月中旬の防除を徹底する。

イ 薬剤は、シペルメトリン水和剤（アグロスリン水和剤2，000倍液又はイ
カズチWDG1，500倍液）、テルスターフロアブル3，000倍液、サム
コルフロアブル10の5，000倍液、フェニックスフロアブル4，000倍
液等を使用する。



2 ハダニ類（カンザワハダニ、クワオオハダニ、ナミハダニ）

（1）予報の内容

発 生 量 やや多い

（2）予報の根拠

ア 8月中旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、慣行防除体系）におけるハダニ類の10葉当たりの寄生個体数は、0.1頭であり平年に比べてやや多い。

イ 8月中旬現在、現地ほ場において発生量の多い園が認められる。

ウ 向こう1か月の気象予報は、ハダニ類の発生に好適な条件になると予想され、発生量はやや多いと予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 発生密度が高い園では、散布量を増やし、丁寧に薬剤散布する。

イ ハダニ類は、発生種によって薬剤の効果が異なるので、種類を十分に見極めて、適切な薬剤を選択する。また、薬剤の散布にあたっては、連用を避けて、輪番散布する。

ウ 薬剤は、ダニゲッターフロアブル2，000倍液、スターマイトフロアブル

2，000倍液、コロマイト乳剤1，500倍、マイトコーネフロアブル1，500倍液、ダニオーテフロアブル2，000倍液等を使用する。

[カ キ]

1 炭疽病

（1）予報の内容

発生時期 平 年 並

発 生 量 平 年 並

（2）予報の根拠

ア 昨年の発生量は平年に比べてやや多く、越冬伝染源量もやや多いと見込まれる。

イ 8月下旬現在、現地ほ場において発生量の増加は認められていない。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 薬剤は、ストライド顆粒水和剤3，000倍液、ナリアWDG2，000倍液等がある。

イ 長雨で散布間隔が長くなると発病が増加するため、定期防除を徹底し、降雨前の防除を心がける。

ウ 発病が認められた新梢や果実は直ちに切除して、園外に持ち出し処分する。

[果樹共通（ナシ、カキ、ブドウ、リンゴ、モモ）]

1 カメムシ類

（1）予報の内容

発 生 量 やや多い

（2）予報の根拠

ア 8月中旬現在、予察灯及び集合フェロモントラップにおけるカメムシ類の誘殺数は平年並～平年に比べてやや多い。

イ 8月中旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、ナシ‘ゴールド二十世紀’、無



袋・殺虫剤無散布）において、カメムシ類の果実被害は確認されていない。
ウ 8月中旬現在、園芸試験場の防風樹であるサンゴジュにおけるカメムシ類の
100果あたりの寄生数は11.5頭（平年：2.4頭）と平年に比べて
多い。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年に比べてやや多いと予想され
る。

（3）防除上注意すべき事項

ア 8月以降、第2世代成虫の発生時期となるため、果樹園への飛来が増加する
恐れがある。

イ 被害や飛来状況は、ほ場間差が大きいため、園内外をこまめに見回り早期発
見に努め、被害果実やカメムシ類の発生が多い場合は早急に防除を行う。

ウ 防除は、カメムシ類が飛来する夕方か早朝が効果的である。また、移動性が
高いため、広域的な防除に努める。

エ 薬剤は樹種ごとの防除暦を参考とする。

オ 樹種によっては収穫中となっているので、農薬の使用基準を遵守する。

野 菜

〔ブロッコリー、イチゴ〕

1 ハスモンヨトウ

（1）予報の内容

発 生 量 平 年 並

（2）予報の根拠

ア 8月中旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）及び現地調査ほ場（大山町）にお
けるフェロモントラップによる誘殺数はともにやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、気温が高く、ハスモンヨトウの発生に好適な
条件が続くと考えられるため、発生量は平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 薬剤の防除効果が高い若齢幼虫期のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察
し、被害がみられた場合には直ちに防除を行う。

イ ブロッコリーでは、若齢幼虫期にディアナSC2，500～5，000倍
液、ヨーバルフロアブル2，500～5，000倍液等を散布する。中～老齢幼

虫が見られる場合にはアクセelfフロアブル1，000～2，000倍液、
プレオフロアブル1，000倍液、ファルコンフロアブル4，000倍液、
グレースシア乳剤2，000～3，000倍液、プロフレアSC
2，000～4，000倍液等を散布する。

ウ イチゴでは、若齢幼虫期にアタブロン乳剤2，000倍液、ノーモルト乳剤
2，000倍液、マッチ乳剤3，000倍液等を散布する。中～老齢幼虫が
見られる場合にはフェニックス顆粒水和剤2，000～4，000倍液、
トルネードエースDF2，000倍液、ファルコンフロアブル4，000倍液、
ディアナSC2，500～5，000倍液、グレースシア乳剤2，000倍液
等を散布する。



[ネギ、ナガイモ]

1 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発 生 量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月中旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）におけるフェロモントラップによる誘殺数はやや多く、現地ネギほ場（米子市夜見町）における誘殺数はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、気温が高く、シロイチモジヨトウの発生に好適な条件が続くと考えられるため、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 幼虫が若齢の時期に防除を行う。この時期を逃すと防除が困難となる。

イ ネギでは、プレオフロアブル1，000倍液、トルネードエースDF1，000倍液、スピノエース顆粒水和剤5，000倍液、プレバソンフロアブル5の2，000倍液、フェニックス顆粒水和剤2，000～4，000倍液、ディアナSC2，500～5，000倍液、グレーシア乳剤2，000～3，000倍液、ヨーバルフロアブル2，500～5，000倍液等を散布する。

ウ ナガイモでは、デルフィン顆粒水和剤1，000倍液等を散布する。



[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、
周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、農林水産省の「農薬登録情報提供システム」から検索で
きます (<https://pesticide.maff.go.jp/>)

なお、農薬の使用や防除指導などに際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病害虫防除所ホームページ>

アドレス <https://www.pref.tottori.lg.jp/boujosyo/>



病害虫発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類等）等の
参考情報、病害虫の診断方法等の情報をお知らせしていますので、御利用ください。

<お問い合わせ>

普通作物関係

〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病害虫防除所

（電話：0857-53-1345、電子メール：byogaichu@pref.tottori.lg.jp）

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

（電話：0857-53-0721、ファクシミリ：0857-53-0723）

果樹・野菜関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

（電話：0858-37-4211、ファクシミリ：0858-37-4822）

※次回、予報第8号の発表は9月9日（水）の予定です。

なお、予定日と実際の発表日が前後することがありますので、御注意ください。

【！県内の病害虫に関する情報を配信中！】

鳥取県病害虫防除所ホームページにて病害虫予察情報を随時更新しています。
各種情報は右の QR コードからご覧いただけます。



「7月から9月は「夏の熱中症 声かけ期間」です」
「熱中症を防ぎましょう」
「野焼きの延焼による山林火災に注意しましょう」
「危ない！耕うん機はぼちぼち運転で」
「農作業中のダニ刺咬に注意！」

鳥取県農林水産部農業振興局経営支援課ホームページ
農業機械・農作業安全

<https://www.pref.tottori.lg.jp/119790.htm>



<連絡先>

〒680-8570 鳥取市東町 1-220

鳥取県農林水産部農業振興局経営支援課農業普及推進室
(電話：0857-26-7327、ファクシミリ：0857-26-7294)